別紙様式２（中等）

令和2年度　県立並木中等教育学校自己評価表

目指す学校像	1　様々な体験を通して広く人間教育を行う学校 2　筑波研究学園都市の一角に位置するという地域性を生かし，大学や研究機関と連携して科学教育を行う学校 3　外国からの研究者・留学生との交流や海外語学研修などを通して，国際教育を行う学校

昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
平成31年度は開校12年目となり，「Be a top learner！」を校是に掲げ，「より高い教育水準・より豊かな教育活動」をめざした教育活動を行った。 アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践により，生徒が学習活動の中で，考えを表現しあったり，納得解を求めて議論したりすることが増えた。またR80による「振り返り」と「再構築」をさせることにより，生徒の論理的な思考が深まり，表現力が高まってきている。 SSH指定第2期の柱となる理数探究のカリキュラムが充実し，生徒が学びを深める場が授業の中に設けられている。また，サイエンスカフェをはじめとする外部からの講師を招いた課外活動についても，生徒の関心を掻き立てている。これらの場の提供が，生徒の学びに向かう姿勢を改善していることは疑いのないところである。科学分野をはじめとするの各種コンクール等において優秀な成績を上げる生徒がでたことも，その成果の一部であると考える。 中等教育学校の特性を生かすためのカリキュラム・マネジメントを行い，6年間を見通した校内体制の整備を進めていきたい。「グランドデザイン2020」については，2020年3月1日に完成している。 また，今年度から「医学コース」を開設し，多様なプログラムを編成することにより，生徒の確かな学力の育成を図ることに努めていきたい。さらに，人間教育の充実についても，課題として留意していきたい事項である。生徒の人権を大切にした丁寧な指導を心がけていきたい。	1　意欲ある学校風土の醸成	○新しい時代に必要となる資質・能力を育成する。 ・「アクティブ・ラーニング」の推進により「論理力」「日本語の4技能」を育てる。 ・ICTの効果的活用を工夫し，生徒の思考力・判断力・表現力等の能力を育てる。 ・縦割り活動を通して，生徒が協働して学ぶ態度やリーダーシップを育てる。	A
	2　志を高く持ち，進路実現に向かう生徒の育成	○体験活動を充実し，6年間を見通した体系的なキャリア教育を展開する。 ○生徒が自らの可能性に挑戦する進学指導を実践する。 ○キャリアカウンセリングを通して，生徒の目標の明確化と支援のできる相談を行う。	A
	3　SSH事業第2期目の推進	○学校設定科目「理数探究」を中心としたカリキュラムの一層の充実を図る。 ○地域連携，高大連携による探究力・論理力の育成を図る。	A
	4　6年間を見通した校内体制の確立	○6年間の教育活動の体系化を図り，内容を精選する。 ○カリキュラム・マネジメントにより教育活動を精選し，校内体制を確立する。 ○令和2年度より医学コース開設し，医療分野に関するテーマで探究活動を行うなど，特色ある教育活動を実施する。	A
	5　業務内容の見直し	○すべての教職員の超過勤務時間を1箇月45時間　年間360時間以内とする。 ○業務の精選を図ると共に会議の持ち方を工夫する。	B

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
1 校務運営部 （教務）	SSH2期目の展開と次期学習指導要領を念頭に置いた教育課程編成，授業時間の確保と行事の調整を行い，学校としての体制を確立する。	SSH関連の講演会等を総合的な学習の時間に位置づける等，年間を見通した計画的な授業時間確保を行うため，学校行事や年次行事の調整を行う。	A	A	生徒の多様な学びのための行事の精選と，授業時間の確保を継。
		「理数探究」の授業を効果的に運営するための行事・日課等の計画や調整を行う。	A		「課題探究」における中間発表会，成果報告会を踏まえた授業時間数の確保。
		SSH2期目の目的を達成するため，教育課程全般を見直し，学校設定科目の新設・改良を十分検討し，学校としての方針を踏まえた体系的なカリキュラム開発を推進する。	A		6年間を見通した教科のグランドデザイン，年次のグランドデザインの作成。
	行事の精選と授業時間の確保に努め，生徒の可能性を引き出す質の高い授業が展開できるような学習環境・システムを整備する。	計画的な運用により現行のA週B週C日課システムの利点を最大限に活かし，授業時間の偏りを減らすための曜日変更や行事の調整を行い，バランスのとれた学習進度を維持する。	A	A	A，B，Cパターンによる年間を見通した時間割構成を行い，バランスのとれた授業時間の確保を継続。
		教務として授業変更を管理し，授業振替を継続して推進する。1時間の授業にこだわることで，生徒・職員ともに「授業を大切にする」意識の徹底を図る。	A		非常勤講師への連絡体制の徹底による，突発的な授業変更への対応。
		定期・実力テストの在り方を検討していく。各教科・年次からの要望も取り入れ，結果が効果的に生徒に還元され，授業で培った力がより正しく評価されていくように，テストの在り方や内容を十分検討していく。	A		検討を継続し，よりよい学習環境・システムを構築する。
	カリキュラム・マネジメントにより，アクティブラーナーを育成するための6年間を見通した校内体制の充実を図る。	アクティブ・ラーニングやICTの活用を取り入れたシラバスを作成し，生徒のアクティブラーナーとしての自覚を高め，意欲を持った学習計画の立案を促す。	A	A	アクティブラーナー育成のための，計画的かつ創意工夫ある授業計画の立案。
		観点別学習状況評価について理解を深め，生徒個々の学習方法のチェックに還元できる評価方法を研究する。大学入学共通テストに関する情報収集，共有に努め，授業への反映を図る。	A		後期課程における要録及び通知票の観点別学習状況評価表記への対応。
		保護者や地域に対するアンケートを実施し，学校外からの意見も取り入れていく。	B		アンケートでのマイナス評価項目への改善策構築。
		医学コースの開設に伴い，その運営等について検証する。	A		検証を継続し，運営方法を吟味する。
	教職員の意識改革を図るとともに，一人ひとりの業務内容を見直し，「働き方改革」を推進することにより，教育水準の維持向上を図る。	職員会議等の資料をペーパーレス化することで会議の時間短縮を図る。	A	B	会議時間厳守の徹底。
		「働き方改革」を推進し，教育水準の維持向上を図るうえでも，行事の精選を行ない，業務内容を削減する。	B		コロナ禍による行事の見直し。
		それぞれの校務分掌や年次において，通年で行ってきた業務を検証し，業務の効率化を図る。	B		教育活動の重点化。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
（総務）	本校の目指す生徒像及び教育活動の活性化を念頭に置いた選抜を行う。	入学者選抜内規を検討する。	A	A	本校の求める生徒像を反映した，より適正に評価できる内規の改善を継続。
		効率的かつ正確な入試事務処理が行えるよう運営計画の工夫改善を図る。学校委員会担当者の負担軽減と業務の細分化を図る。	A		学校委員の負担軽減とヒューマンエラー発生への的確な対処を継続。
	多様な手段により，本校教育活動についての広報活動をより一層充実させる。	生徒が主体となり生徒目線での学校説明会を企画する。日頃のアクティブ・ラーニングの実践や研究を生かした学校公開等の企画・立案を検討する。	A		本校の特徴を発信するとともに，今年度はコロナ禍で実施出来なかったが来年度は生徒主体の発表を中心とした説明会を継続。
		生徒の躍動感をアピールする学校案内パンフレットやリーフレットを作成する。	A		生徒の活躍する写真を多数掲載し，躍動感あふれるパンフレットやリーフレットの作成。
		直感的でわかりやすいHPの構成やデザインを検討するとともに，本校の教育活動を外部に発信するツールとして積極的にHP（並木ブログ）の更新を図っていく。	A		生徒の活躍に関する情報を積極的に発信していくための更新を継続（並木ブログ）。
	儀式的行事を円滑に運営する。	始業式，終業式，入学式，卒業証書授与式，修了式等の企画・運営を円滑に行う。	A		今年度はコロナ禍での実施だったが，臨機応変に対応する体制を構築する。
		校内の放送機器等の整備拡充を行う。	B		映像を伴う放送集会の企画立案と，老朽化した機器の更新。
（渉外）	渉外活動の充実と会員同士の親睦を図る。	PTA総会，本部役員会及び合同役員会を企画・運営する。	A	B	今年度はコロナ禍で様々な制約のもと可能な範囲で実施したが，来年度も臨機応変に対応する。
		県高P連及び県西高P連との連携・協力を図る。	B		他校との情報交換による連携継続。
		年次委員会，広報委員会，研修委員会，生徒指導委員会，支部会を開催する。	B		円滑な組織運営のための情報共有を継続。
		かえで祭（文化祭），ウォークラリー等，学校行事への保護者の参加協力を積極的に呼びかける。	B		今年度はコロナ禍で開催できなかったが，今まで通りに案内の周知による，参加者数の維持。
2 企画研究部	6年間を見通した「理数探究」の指導体制の確立を図る。	生徒一人一人の理数探究の充実，及び指導する教員の指導力の向上を図り，年間を通して「理数探究」の授業の充実を図り，6年間を見通した「理数探究」の指導体制の確立を図る。	A	A	文理融合ゼミの新設など課題探究ゼミの再編を行う。
	SSH事業第2期目の推進	中高一貫教育を活かした探究力・論理力を育成するカリキュラムの開発と教材・指導法の実践的研究の充実を図る。	A		SSH第3期指定に向けて，第3期で計画している取組を先行実施する。
	ユネスコスクールとして国際教育の充実と各種海外研修の充実を図る。	ユネスコスクールとして日々の授業や様々な国際的な体験を通じ次代の日本・世界の発展を担う「人間力」を備えたグローバルリーダー育成を図る。	B		コロナ禍長期化により、今後数年はコロナ禍においての国際教育を構築することが必要である。
（探究）	・理数探究の運営方法を改善発展 ・前期課程ミニ課題探究の運営方法の系統化	①医学ゼミの運営を検討する	A	A	3年次生の取り組み方を検討する。
		②文系探究を方法を改善発展させる	A		対話型探究の手法を確立する。
		③4年次のゼミ選択の方法を検討する	A		1学期のゼミツアーの方法を検討する。
		④前期課程ミニ課題探究のカリキュラム開発を行う。ミニ課題探究の運営方法を系統化し，6年間の一貫した理数探究指導体制を確立する。	B		年次ごとで育てたい力を明確化し，4・5年次の課題探究とのつながりを体系化する（哲学対話やSDGsの導入）。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
（SSH）	・SSH第2期の中間評価をもとにした，研究開発課題に対する実践的な取組と評価 ・探究力，論理力を育成するカリキュラム開発 ・地域連携・高大連携による探究力・論理力育成システムの構築	① 先生方の協力の下，探究力・論理力を育成するカリキュラム開発を行う。（理数探究基礎，理数探究，論理国語，SS理科科目，数理科学A・B）	A	A	・SS理科科目における年間を通しての出前授業の内容の検討 ・数理科学A・Bのカリキュラム開発
		② 地域連携，高大連携による探究力，論理力育成システムを構築する。（つくばサイエンスフロント，社会問題ミーテイング，CSトレーニング）	A		・コロナ禍におけるつくばサイエンスフロントの実施形態，評価についての検討
		③ 科学技術系人材育成を図る。（医学ゼミ，科学研究部，科学の甲子園およびジュニア，科学オリンピックの活動支援）	A		・科学研究部での人材育成に関する評価について検討する。
		④ 他校への普及活動に力を入れる。（授業公開，成果報告会，SSH通信）	B		・SSH通信，Webページ作成の係の新設を検討する。
		⑤ 事業の分析・評価を行う。	B		・各事業に対する評価の観点の検討，調査を行う ・ルーブリック評価の導入について検討する。
（SGS）	・国際教育・国際交流など特色ある学校づくりの取組 ・ユネスコスクールとしてESD教育への積極的な取組と普及 ・長期留学制度の持続可能な制度構築と様々な留学事業の機会の提供	① SSH事業とリンクをさせた国際教育を充実させる。例：英語科と他教科のクロスカリキュラム実施やICT活用，アクティブ・ラーニング等	C	B	毎年依頼されるJSTからのアジア留学生受け入れがコロナ禍で中止となった。今後の見通しがたたない状況にある。
		② キャリア教育の視点や，外部機関との連携を踏まえて，各年次に最もふさわしい国際教育に関わる行事を選択し，当該年次に提示する。	C		毎年国際観光課から依頼される海外研修の受け入れがコロナ禍で中止となった。今後の見通しがたたない状況にある。
		③ ニュージーランド短期語学研修はじめ，NZや他国の長期留学から帰国してくる本校生徒がもたらすグローバルな経験を本校生徒とシェアできる機会を設ける。	A		長期留学1期生3名が無事帰国。1名は留学延長のため、今後も現地の生徒および日本国内の保護者との連携を密に行う。帰国した生徒たちの留学報告会を実施予定。
3 学校生活部 （生徒指導部）	基本的生活習慣を育成し，他人との協調性を養い，自己実現を目指す。	全職員の共通理解と指導を徹底する。	A	A	全職員の共通理解と6年間一貫指導の継続。
		自主的に「挨拶をする・装を正す・時間を守る」が出来るよう努める。	A		制服は個性ではなくて協調であることの自覚化。
		マナーアップ活動を通して，校則を遵守する態度の育成を目指す。	A		継続的かつ計画的に活動の促進。
	保護者・関係諸機関との連携を密にし，問題行動の未然防止を目指す。	保護者との連携・協力を密にする。	A		保護者との連携を密にして，家庭との協力による事故の未然防止。
		各中学校・警察等の関係諸機関との連携・協力を図る。	A		学校と警察の連絡制度の活用及び連携。並木交番への行事への協力要請。
		生徒事故の未然防止に努める。	A		日常から生徒の行動を観察し，小さな変化にも対応して更に未然防止を図る。
	安全教育の推進を図り，自己防衛意識・自己管理の育成を目指す。	登下校時の立哨指導・巡回指導を計画的に実施する。	A		登校時指導を継続的に実施し交通安全，事故未然防止に努める。つくば・荒川沖駅の立哨指導を計画的に実施。
		交通安全教育の徹底を図る。	A		定期的に講習会を開催し交通安全の意識を高揚。事故予測能力および回避能力の育成。
		定期的に自転車点検を実施する。	A		今後業者とも連携して定期的に実施。
（教育相談）	心の問題を抱えている生徒の早期発見と早期対応を図る。	年次と情報を共有し，休みがちな生徒に対して，チーム支援の充実を図る。	A	A	年次や生徒指導部，養護教諭との連携を図りながら，休みがちな生徒への対応が担任だけの負担にならないようにサポートし職員研修は実施したが，不登校菜マニュアルの作成には至らなかった。次年度への課題である。 担任が実施する教育相談で気になる生徒について挙げてもらったものでカウンセリングを必要とする生徒には積極的に繋いだ。 カウンセリング予約をする保護者と電話で概要を聞きながら，共感的理解を図り，医療機関への受診を進めるケースもあった。 カウンセラーから聞き得た情報をもとに，学年団でサポートしてもらえるよう，連携を図った。 事前・事後のSCや学年・担任との連携は密に図り，学校での様子やカウンセリングで出てきた問題などを共有して活かした。
		校内研修会を実施し，不登校マニュアルや相談室便りを発行する。	B		
	年次・保護者との連携強化を図る。	生徒へのアプローチについて教育相談的視点からのアドバイスをする。	A		
		保護者との連携を密にする。また場合によっては医療機関等の紹介をする。	A		
	スクールカウンセラー（SC）の積極的活用を図る。	カウンセリングを受ける生徒に対して，学校生活の中で支援を図る。	A		
		カウンセリングにおいて，SCと年次・担任等の間の連絡調整を支援する。	A		

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
（保健安全）	生徒の健康・安全・健康教育の推進に努める。	健康診断は校医と相談し，合理的且つ円滑に行い，要治療者については早期治療を徹底する。	A	A	コロナウイルス感染症の影響で例年通りの健康診断が実施できずに10月中旬までに延長して行った。要治療者が夏期休業を使って治療することができなかったのでその影響が心配される。保健室利用をする生徒や養護教諭が個別に関わる必要のある生徒の数が多く、慎重に対応する必要がある生徒が増加してい
		日常的な保健室利用生徒について，年次・担任・保護者との緊密な連携を図る。	A		
	校舎内外の美化と安全を図る。	年次縦割りの清掃班による清掃活動の充実化を図る。	A		・年次縦割りの清掃が浸透して順調に清掃が行われている。考査期間中は学年によって期間や時間が違っていて、担当教員もそれに準ずるため簡単清掃にしていたが、場所によっては清掃が必要なことがわかった。来年度は「リクエスト清掃」を取り入れて必要な場所で清掃ができるようにしたい。 ・コロナウイルス感染症の影響で4月の避難経路確認を行うことができなかった。また、PTAと連携する防災連絡会議を開催することもできなかった。
		ワックスがけおよび清掃強化週間を実施し，校内の美化に努める。	B		
		危険箇所の点検を行ない，改善・修繕に努力する。	A		
		災害時等の対応マニュアルの見直しを行い，全職員に周知徹底する。	B		
		避難訓練を年2回実施する。訓練に際しては，地域との連携を図る。	B		
（食育）	正しい食事のあり方や望ましい食習慣を身につけ，食に感謝し，楽しく食事ができるようにする。	全職員の共通理解のもと，安全と食育指導上，適切な指示をしながら給食指導を行う。	A	A	偏食・小食の生徒への継続的な指導と管理栄養士による栄養指導を実施する。
		給食係や給食委員会による常時活動の活性化を図り，給食の円滑な配膳や片付けを行えるようにする。	A		給食係・給食委員の常時活動の活性化を図る。
		職員も教室で生徒とともに一緒に給食を食べながら，適宜，食事のマナーの指導，栄養や食文化の理解，望ましい人間関係の育成を図る。	A		給食指導を通し，生徒とのコミュニケーションを深め，望ましい人間関係と生徒理解を図る。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
4 特別活動部	部活動の活発化	中等前期・後期課程の生徒を含めた中高6年間一貫の活動方法を，前年度に引き続き模索する。	A	B	前期課程，後期課程での合同練習を実施している部活動もあるが，ルールや場所の問題が障壁になっている。
		部活動における質の高い活動を推進し，個の育成と集団のレベルアップを図る。	B		今年度同様コロナウィルスのため，活動時間が制限されるため，効率的な活動方法を模索が必要である。
		部顧問の適切な配置を考え，学校全体としての指導体制をより充実させる。	B		主顧問と副顧問の連携を充実させ，より良い指導体制を築いていく。
	主体性のある生徒会活動の推進	生徒会役員が，主体性を持って生徒会活動を進められるようにする。	B		コロナ禍において，どのような活動ができるか生徒会中心に話し合い，一般生徒からの意見をまめ，精査する。
		中等前期・後期課程の生徒を含めた生徒会活動のあり方を，前年度に引き続き模索する。	B		縦割りの生徒会活動を充実させるための方策を模索する。
		生徒会役員選挙に多くの候補者が立候補するよう生徒の意識を高揚させる。	A		各年次担任にも協力を要請し，意識の高揚を図る。
	学校行事の活性化	かえで祭の実行委員を適正数にし，生徒による質の高い企画・運営力の向上を目指す。	B		今年度実施していないので，しっかりと引継ぎを行うなど次年度に生かす。また，コロナ禍出の実施方法を模索する。例年実行委員が多すぎて潤滑な活動に支障を来すため，来年度も適性数を考えた方がよい。
		前期・後期課程の生徒が一体化したかえで祭を作り出す。	B		各年次の特色を活かし，より一層，充実したかえで祭を作り上げる。
		前期・後期課程の生徒が主体的に企画運営し，スポーツデイを成功に導く。	A		より生徒主体で実施できるように来年度も計画する。
		WRの実行委員を増やし，生徒による企画・運営力の向上をめざす。	B		コロナ禍での実施を検討する。道路事情の変化により危険な箇所も増えているので，実行委員の安全意識を向上させる。
	ウォークラリー（WR）を通した心身の健全な育成と集団意識の高揚	体育授業での歩行練習で規範意識や生徒の体力の増進に努める。	A		WR本番の天候や道路事情を考えた歩行練習，規範意識の高揚を図る。
		生徒自ら集団歩行・行動の大切さを身につけ，お互い協力して歩行できるよう促す。	A		安全意識を高め，お互いに注意し合えるような，意識の高揚を図る。
		上級生から下級生まで全校生徒が一つになり行事の成功に向かうよう働きかける。	A		後期課程の規範意識を引き締め，安全で一体感のあるWRを作り上げる。
	キャリアパスポート事業として、人間関係形成・社会形成能力,自己理解・自己管理能力,課題対応能力,キャリアプランニング能力等を高める。	学級活動や部活動等で人間関係を養う能力を形成する力を目指す	A		人間関係を養う能力を形成する。
		委員会活動や実行委員会活動等でさまざまな課題を発見分析し、適切な計画を立ててその課題を処理解決することができる能力を身につけさせる	B		適切な計画，さらに解決能力を身につけさせる。
5 学習進路部 （進路指導）	6年間を見通したキャリア教育を促進し，生徒が可能性に挑戦する進学指導を実践する。	年次に合わせた進路行事の体験を通して職業観や進路意識を高める。	B	A	コロナ禍での体験活動の制約
		進路だより・進学要覧を改訂し，ガイダンスとあわせて，生徒への啓発と保護者への情報提供を拡充する。	A		質の高い情報提供の継続
		個人面談の充実により生徒に高い志と進路目標を持たせ，学習時間の向上を図る。後期課程では土曜学習会を実施する。	A		土曜学習会の教員待遇の改善に成功
		模試学力分析会・進路研修会・学習状況調査により生徒情報を共有し，面談力の向上を図る。	A		教員の研修の充実を継続する
（授業研究）	教員の学習指導力のレベルアップを図る。	毎月の授業参観（ちょっと見週間）を実施する。ちょっと見に連動してアクティブ・ラーニングやICT，TO授業をとりいれた授業公開を実施する。	B		ちょっと見週間が変化。映像を見て，対面参観が減っている。形式変化に対応
		教師向け研修会・外部教員研修参加の促進により学習指導力の向上を目指す。	B		コロナ禍で研究会開催方法が変化

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
（学習環境）	学習環境を整備する。	ブライトホールの整備を進め，利用を促進する。	A	A	平日夜の教員待遇改善が急務。利用者増加策の継続・促進
		進路指導室の整備を進め，利用を促進する。	A		現在のレベルを維持したい
		赤本の充実を図る。	A		現在のレベルを維持したい
（図書館運営）	図書館運営を充実させる。	図書の充実を図り，図書室利用を促進する。	A		校内ビブリオバトルの開催，今後も継続したい
6 PCシステム	IT機器を整備する。（特にハード面）	教室，特別教室等のPCリース更新（2020）をスムーズに行う。	A	A	保守無リース更新した。2021年8月末に撤去される。この業務をスムーズに引き継ぐ。
		ネットワークの整備を計画する。今年度はPC室・ブライトホールについても，無線のネットワーク敷設を検討する。	A		GIGAスクールが前倒しになった。3月末には工事が終わるので，この運用をスムーズに引き継ぐ。
		14回生入学時のChromeBook導入に向けての環境整備を行う	A		上記同様，前倒しでChromebookが配布された。この管理をスムーズに行う。
	ホームページの再構築	年数を重ねて，無計画に肥大したホームページの構成を見直す。管理職，広報担当の教職員と内容や構成について検討し，どの情報を誰が知りたいのかを整理する。	B		より内容の精選が必要。音声や動画を用いた動的なものが時代にあっていると感じる。
7 学校事務	教育環境及び生徒の学校生活環境の充実	授業研究が円滑に行われる様，必要な設備・備品を整える。	A	B	コロナ対応・ICT推進など通常教育活動以外の突発的業務が考えられるが、授業研究に支障のないように対応したい。
		生徒が安全安心して学校生活を送るため，環境美化を含めた学校施設の整備に努める。特に施設の老朽化により不具合ある施設設備については，早急に対応する。	B		県有施設長寿命化計画が実施され、多くの工事が施工される可能性があるが、計画にない老朽化した施設設備等について、安全性・使い勝手を優先して改修していきたい。
8 1年次	学習習慣を確立し，主体的に学習に取り組む生徒の育成	授業や課題を通し，基礎・基本の定着を図るとともに，生徒が主体的に学ぶことができるように，「学び方」についての学習指導を行う。	B	A	学習に、前向きに取り組むことはできている。より主体的に学ぶことができるように、授業や課題の工夫を行っていく。
		フォーサイトの活用を通し，見通しをもって自主的に学習に取り組む態度を育成すると共に，面談を定期的に行い，個に応じた助言や支援を行う。	A		フォーサイトの活用や面談を通して、学習や生活習慣について、個に応じた助言や支援を行うことができた。
	礼儀正しく，他者と協働することができる生徒の育成	学級活動や道徳の授業を通して，礼儀正しく生活する態度と互いの人権を尊重する態度を育てる。	A		互いの人権を大切にして生活することができている。次年度も継続していきたい。
		学習活動で対話活動を積極的に取り入れ，討論・内省的対話・生成的対話ができるようにする。	A		対話活動を行うことで、生成的対話ができるようになってきている。次年度も継続していきたい。
	主体的に考え，判断し，行動することができる生徒の育成	各活動を計画的に実施するとともに活動方法についての助言をし，学習・学級活動・学校行事を生徒主体で行うことができるようにする。	A		コロナウイルス感染症の影響で、中止になった行事もあったが、実施した行事や活動は、生徒主体で行うことができた。
		各学習活動で探究学習を実施し，自分で問いを立て，考え，納得解を出せるように支援する。	B		総合的な学習の時間で、探究学習を行った。次年度は、より多くの教科で取り入れていきたい。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
9 2年次	各個の実態を見極め，「基礎からの発展」と「基礎の補強」に対応する，柔軟な学習指導の充実	学習意欲を継続するための授業展開の工夫に努めると共に，学習意欲の減退した生徒に対する具体的で連携的な指導を実施する。	B	A	学習意欲を高めるような個に応じた指導は不十分であった。
		自身の進路の枠組みや方向性を意識し，夢をもって生活するための生きたキャリア教育を推進する。	A		オンラインによるキャリア学習を多く取り入れることができた。
	道徳的な価値観を育成し，集団生活の秩序や礼儀作法について自ら考え，行動することのできる指導・カリキュラムの充実	時と場にふさわしい挨拶が自然にできる雰囲気を作り，よりよい人間関係を構築すると共に，後輩の手本となる基本的生活習慣の確立に努める。	B		あいさつをはじめ基本的生活習慣の確立に課題が残る。
		道徳の時間を通して，集団生活の在り方の思考と自己肯定感の育成を計画的に実施する。	A		計画に沿った授業展開ができた。
	これまでの経験を生かして後輩を先達し，部活動や課外活動に目的と責任をもって取り組む，心身共にたくましい人間づくりの充実	放課後の時間の生徒の動きを明確化すると共に，自ら計画性をもって諸活動に自主的に取り組むことのできる生徒の育成に努める。	A		部活動や実行委員会に熱心に取り組む生徒が多かった。
		教育相談の充実に努め，定期的な面談・懇談に加えて日々の雑談も大切にして，学校生活へのエネルギーを一人一人が蓄積できるようにする。	A		計画に沿って実施できた。
10 3年次	自ら課題を見つけ解決する能力をもった生徒を育成する。	ALを通して，自分の考えを伝えたり，友達の意見を聞いたりする場面を多く設定し，自ら考え積極的に活動できる授業を行う。	A	A	生徒間の距離を保ち、積極的に意見交換をし、学習する事ができた。
		総合的な学習の時間や年次行事において，ICTを積極的に活用したり，効果的活用を工夫したりして，生徒の思考力・判断力・表現力等の能力を育てる。	A		ICT機器を積極的に活用し、授業に生かすことができた。
	社会貢献できる生徒を育成する。	進路指導，大学見学，広島京都平和研修，講演会などの体験活動を充実させ，4年後を見通した発達段階にあったキャリア教育を展開する。	B		講演会や体験活動は、思うように実施することができなかった。
		様々な活動に実行委員を立ち上げ，生徒企画・運営の活動を多くすることで，人の役に立つ経験をさせ，主体性，計画性，実践力を育てる。	A		研修旅行を始め、行事を通して、主体性・計画性・実践力を育てることができた。
	前期課程最高年次として，他の年次の模範となる生徒を育成する。	元気な挨拶のできるように日頃から指導を行う。さらに学校のルールや，公共のマナーなどに対する意識を高める声かけを行い，実践・振り返りをする活動を取り入れる。	B		基本的な生活習慣の確立は、朝の遅刻をはじめ今後も課題として取り組む必要がある。
		計画性への意識を高め，実践できる生徒を育成するために，フォーサイト手帳を有効活用する方法を指導し，支援を行う。	B		フォーサイト手帳を、より有効に活用する必要がある。
	仲間と切磋琢磨でき、自立した生徒の育成	AL授業や道徳，学活の充実を図り，仲間がいるからこそ得られる新たな考え方や視野を広げ，自分を成長させてくれる仲間への感謝の気持ちをもてる生徒を育成する。	A		仲間と共に、AL授業等に積極的に参加し、何事に対しても感謝の気持ちを持つ事ができた。
		前期課程最高年次として，部活動の中心的な立場としての意識を高めさる。積極的な参加を促し、自立した生徒を育成する。	A		部活動には積極的に参加し、自立した行動をとることができた。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
11 4年次	基本的生活習慣の育成	挨拶を励行し，服装指導，清掃指導を徹底する。	B	B	清掃分担が均等になるよう指導する
		基本的生活習慣を身につけさせ，遅刻をさせないとともに，話をしっかりと聞く態度を養う。	B		遅刻する生徒は少ないが、服装がルーズな生徒は数名いる
		長欠生徒らに，年次教員全体で善後策を講じることで，問題解決に努める。	B		生徒自身の前に進む力を育てながら、結論を出していく。
		道徳の授業を年次職員がローテーションして行うことで，心を多面的に養う。	A		各担当が工夫を凝らして、何を伝えるかを明確にして授業を行った。
		ICTを活用し，情報の共有を図ることで，自律すると同時に利他的に行動できる生徒を育成し，志の高い集団形成を図る。	B		一人一台持ち込みとなった際の授業での活用法について研究する
	自律した人格の育成と学習の習慣化および基礎学力の育成を図る	現5・6年次の取り組みを参考にしながら，大学共通テストへの対応を念頭に，思考力を高める授業スタイルを積極的に導入し，応用・発展へと広がりのある授業を展開する。国公立大学の二次試験に対応できる論理性・表現力を育成する。	B		教科の枠を超えての取組が継続して必要
		授業や週末課題を通して高い目標に結びつけられるような学習課題を与え、課題に対して自ら考え抜いて取り組む力を育成する	B		課題をこなせない生徒への指導を継続して行う
		朝の小テスト，週末課題，模試等の実施による学習の習慣化および学力向上を図る。	B		与えられたことをこなすだけでなく自ら行動する力を継続して養う
		学習過程の蓄積、学習時間の記録や保護者との情報の共有にICTを活用し，集団としての学力向上を図る。	A		オンライン授業に対応し、様々な場面で適切に使用の機会を作り、蓄積のための働きかけがなされた。
		進路講演会，大学見学会，卒業生との学習相談会等により，自己理解と進路意識の向上を図る。	A		大学見学等に行けない部分を補うべく、多様な形で講演会等を行った。
	自己理解と進路意識の高揚	大学見学会等で適宜情報を与えることで，文理選択や難関大学への進学を早期に意識させる。また，LHR，総合的な学習の時間等を活用して，生徒全体かつ個々に対して進学に関するアドバイスや情報提供に努める。	B		これからより現実味が増すので、全体としての意識の向上を継続して図る
		蛍雪時代等を活用して進路情報への興味関心を高め，自ら情報を収集する生徒を育成する。	B		教室に置くだけでなく使い方の指導も行う
12 5年次	基本的生活習慣の育成	挨拶を励行し，服装指導，清掃指導を徹底する。	B	A	特定の生徒ではあるが，ブレザーの前ボタンを開けている生徒がおり，継続的な指導が必要である。
		基本的生活習慣を身につけさせ，遅刻をさせないとともに，話をしっかりと聞く態度を養う。	B		特定の生徒ではあるが遅刻が常習化している生徒が見受けられ，家庭の協力のもと，改善を促す必要がある。
		生徒との面談を定期的に実施し，生徒理解や生徒の心の悩みを把握する。	A		様々な理由により不登校傾向の生徒がおり，家庭と連携しながら対応が必要である。
		ICTを活用し，情報の共有を図ることで，利他的に行動できる生徒を育成し，志の高い集団形成を図る。	A		ICTを活用した生徒・保護者と迅速な情報共有を，次年度も継続する。
	学習習慣と基礎学力の育成	大学共通テストへの対応を念頭に，思考力を高める授業スタイルを積極的に導入し，応用・発展へと広がりのある授業を展開する。また，効果的に課外を実施し，国公立大学の二次試験に対応できる論理性・表現力を育成する。	A		必要に応じて，アクティブラーニングを取り入れ，生徒が能動的に学ぶ授業を展開する。
		朝の小テスト，週末課題，模試等の実施による学習の習慣化および学力向上を図る。	A		次年度も計画的に実施する。
		学習時間の記録や保護者との情報の共有にICTを活用し，集団としての学力向上を図る。	A		集団として進路実現に取り組む意識の醸成を図る。
	異文化理解と自己理解について考察を深める生徒の育成	ベトナムへの修学旅行をとおして，異文化理解および異文化から自国の文化を再確認する。	A		コロナウイルス感染症の影響で海外では実施できなかったが，本状況下で最大限可能な形で修学旅行をとり行うことができた。
		最終年次に向けて，大学模擬授業や進路講演会をとおして自己理解を深め，進路意識の向上を図る。	A		今後もコロナウイルス感染症の影響が考えられるため，継続してwebの利用など模索していく必要がある。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
13 6年次	規律と活力ある基本的生活習慣・学習習慣の完成	服装・挨拶・清掃・遅刻指導を徹底することで，基本的生活習慣や社会力を育成する。	A	A	受験生であっても服装指導は継続した。2月の自由登校中も自発的に給油や清掃を有志で続けた。
		わかりやすい授業を展開し，授業を大切にする雰囲気作りに努め，家庭学習の習慣化を図り，志望進路に対応できる学力を定着させる。	A		例年よりも学習時間は増加した。休校後も動画配信をする授業もあり、テストの解説や授業の予習復習などで活用する生徒が増えた。休校のせいか小テストにしっかりと取り組む生徒が増えた。
	生徒間，生徒と教師間の信頼感を醸成し，集団としての凝集性を高める	主体的な学習集団を目指し，セルフスタディースペースやブライトホールの活用を促し，お互いに切磋琢磨する雰囲気の醸成に努める。	A		ブライトホールやセルフスタディスペースでの学習が中心であった。教室やラーニングコモンズの使用は少なかったが同じ場所で学習する生徒が多かったため、目的は達成できたと思われる。
		担任および副担任との面談に加え，主任，副主任など年次職員との面談を行い，クラスの枠にとらわれず6年次職員団として生徒情報の共有を図る。	A		休校もあったが、担任を中心に面談を実施した。特に共通テスト後は年次職員全員で出願先検討面談を実施し、情報共有を図った。教科担任情報交換会は年間3回実施した。
	志高い進路意識の維持による進路実現	年次集会や進路講演会での講話をとおして，生徒の第一志望への意欲を維持させる。また，チーム並木として，集団で受験に向かう環境を作る。	A		通常の年次集会に加え、夏前、共通テスト50日前、30日前、3日前、前日集会を計画し、集団としての意識の高揚を図った。最後の集会では生徒が6年間の総括をする場も設定した。
		LHRや総合的な学習の時間においては，将来への目標確認を行うことで，自らのキャリア観を意識させ，課外学習においては，質の高い学力の向上を図る。	A		進路に応じた課外授業の充実を図った。休校中にも動画配信を行い、前年度6年次職員の話をきく講演会を実施した。感染症対策で通常のOBOGガイダンスは実施できなかったため、卒業生バンクを利用して個別に卒業生と在校生がつながることができるようにした。
	最上級生としての自覚により，下級生に範を垂れる	年度前半の学校行事や部活動に悔いなく取り組ませることで，最上級生としてのリーダーシップを発揮させる。	B		感染症対策で全校一斉の活動はできなかった。スポーツディではNZのハカを5年次がエールとして行い、6年次がそれに応えるという形を、前後の年次と作ることができたので、伝統として続いていくことを願う。
		縦割り活動をとおして，最上級生としての振る舞いを自覚させることで，並木中等の学風をつくる覚悟を促す。	A		清掃時に下級生に指示したり自らがしっかりと清掃したり、挨拶を積極的にしたり、学習に励むことで最上級生としての振る舞いを自覚することにつながったと思われる。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
14 国語科	基本的な学習習慣の定着	学習ガイダンスを重視し，こまめに行うことで，学習の見通しを持たせ，計画的に学習しようとする態度を育てると共に，予習・復習の学習習慣を身につけさせる。	B	A	感染症による休校期間があり、年度当初のガイダンスが通常通りできず、想定したような学習習慣が適切な時期に身につかなかった生徒もいた。状況の変化にも柔軟に対応できるような方策を考えたい。
		単元ごとに明確な到達目標を提示し，段階に合わせた授業計画と評価計画を提示する。	A		
	読解指導の深化	論理的文章・文学的文章の読解法について解説する中で，芸術論や科学論等幅広い分野の文章を客観的に読解できる力を育成する。	A		TO学習の異学年交流は効果的なので、次年度以降も継続できるよう環境を整える。
		AL型授業展開をすることにより，他者との関わりの中での学び合いの機会を設けることで、読解力の向上を目指す。	A		
	「書くこと」の指導の徹底	「読むこと」や「聞くこと」と関連させながら，ノート指導を基本とし，書くことを通して思考をまとめる方法を学ばせるようにする。	A		発達段階に合わせた指導をする。
		各年次に合わせた添削指導を行うことにより，論理的な文章表現力の向上を図る。	A		
	「聞く」態度の育成と適切な話し方の指導	正しく内容を理解するために，状況に応じて「聞く」，「聴く」，「訊く」の3種類の「きく」を使い分けられる生徒を育てる。メモを活用した聞き方についても指導を行う。	A		発達段階に合わせた指導をする。
		場と内容に応じ，聞き手を意識した「話し方」を工夫しようとする態度を育てる。	A		
	研修機会の充実	研修会等に積極的に参加して，授業作りの参考になる情報を集めて活用する。	A		共通テストを国語科担当の教員全員で解き、解法を検討し合うことで受験指導のあり方を共有していく。
		定期的な教科会を開くと共に，互見授業を行うことで年次進行に合わせた授業法の研究を行い，新たな指導法の構築を図る。	A		
		他教科の授業を積極的に参観し，指導法の工夫を取り入れる。	A		
15 社会科	6年間を見通した教科指導体制を構築すると共に，各時期において身につけるべき能力を明確に定めて授業実践を行う。	シラバスを活用し，観点別学習状況評価を円滑に実施すると共に，各年次での学習日標を明確に提示した上で実践を行う。	B	A	観点別学習状況評価の実施が十分ではなかった。次年度は評価項目や評価方法を科会の中で共通理解を図り、実施していきたい。
		生徒の発達段階に応じた学習内容と方法を検討し，実践に生かす。 ・基礎期（中1～2）　学習内容を精選し，言語活動を積極的に導入する。 ・充実期（中3～4）　効果的な先取り学習や教科横断型授業の研究を進める。 ・発展期（中5～6）　進路実現に必要な学力を養成する。 多様な進路希望に対応できる科目選択の在り方を研究する。	A		中3での先取り学習（中4の内容）は実施していない。 それ以外に関しては、発達段階に応じてねらいに沿った学習が展開された。
	生徒主体の授業の展開を常に意識し，学習意欲を喚起するための指導法の工夫と改善を図る。	「アクティブ・ラーニング」を積極的に取り入れた授業を実践する。 ・教科会での話し合いを生かしながら能動的な学習につなげられるような学習課題や発問の開発を継続する。 ・ICTを積極的に活用することで，課題探究に対する意欲を高めると共に，思考力や表現力の育成を図る。 ・R80を活用して，自身の考えを論理的に記述したり表現したりするなど，言語活動の充実を図る。 ・TO学習を取り入れ，学習成果の確認や課題の克服を生徒同士で行うことにより，学習意欲を高めると共に，学びの中から豊かな人間性を育む。	A		積極的にAL授業が行えた。 次年度は、科会の中で授業の実践例などを共有し、指導力の向上につなげたい。特に前期と後期の担当者間での交流を深めることで，6年間を見通した教科指導体制の構築の一層の充実を図りたい。
		自ら学ぶ生徒を養成するための工夫 ・課題提出や小テスト，家庭学習を充実させることにより基礎的・基本的な知識や技能の習得を図る。 ・課外授業や添削活動・模擬試験を有効活用する。	A		小テスト（単元テスト）の実施やワークや学習プリントといった課題の定期的な提出、課外授業等を年間を通して継続的に行うことができた。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
16 数学科	基礎・基本の定着とともに，論理力を高め，応用力の育成	生徒が考えればわかる，やれば解けると思えるように，アクティブ・ラーニングを踏まえた授業展開やICTを活用した説明方法を工夫する。	A	A	例題提示の仕方や発問内容を工夫する。
		年に何度かTO学習を実施し，下級生に教える経験を通して，基礎・基本の重要性を見直し，またその理解を深める。	B		TO学習を行う機会を増やす。
		定期的に課題を与え，家庭学習と充実させ，基礎・基本の定着を図る。	A		年次ごとに課題を精選する。小テストを実施する。
		定期テスト，実力テストの問題検討に十分時間をとり，基礎・基本の定着，論理力，応用力の育成までを目的とした問題を作成し，出題する。	A		年次担当者間で意見交換の時間を十分に確保する。
		生徒の学力に応じて学習内容を精選し，深化的・発展的な内容の学習も行う。	A		学習進度に応じて入試問題の提示やその添削などを行う。
	学習意欲を喚起する指導の工夫	SSHの取り組みを踏まえ，他教科と協力して教科横断型の授業などの数学的活動の充実を図り，探究力・論理力の育成を目指す。	B		クロスカリキュラム授業の計画と開発
		課題や課題提示の仕方を工夫し，生徒たちの知的好奇心を喚起する。	A		視覚教材の利用
		ICTを積極的に活用し，数学的な思考力・表現力の育成を目指す。	A		教員のICTスキルアップを図る。
	生徒の能力差をふまえ，個に応じた指導	きめ細かな指導をするため，習熟度別学習・少人数学習を工夫改善する。	A		少人数、習熟度授業の実施
		生徒の実態を把握し，個に応じた助言・指導が行えるようにする。	A		課外や追試、補習授業の実施
17 理科	基礎力の定着，学力の向上	オリジナルプリントや小テストなどを活用して，時間を効率的に使い，演習時間などを多くとり，基礎学力の徹底を図る。	A	A	より効果的な実践を図る。
		アクティブ・ラーニングやICT活用，TO学習等により生徒の主体的学習態度の育成を図る。	A		発達段階を意識した活用を計画的に行う。
	SSH第2期目の推進のため，つくばという立地を生かした授業研究	つくばの研究所や施設を利用した地域との連携，筑波大学などとの高大連携により，生徒の探究力・論理力の育成を図る	A		さらなる高大連携を推進する。
		ICTや外部講師を活用した出前授業等を研究する。	A		各年次の出前授業を体系化し、コロナ禍における効果的なオンライン授業の方策
	6年間の系統的なカリキュラムを実践・修正	SSHで開発してきたSS科目により，高校教科書の一部を先取りして学習し，スパイラルをいかしたカリキュラムを実践し，前期から後期への接続の体系化を図る。	B		学びのロードマップを適宜改善し、６年間を見通した学力向上の指導のあり方を共有し、円滑に進める。
		同じ科目を教える教科担当同士が密に連絡を取り合い，スムーズに接続できるようにする。	A		教員間でさらに情報交換を積極的に行う。
	生徒の学力を向上させ，探究の過程を学ぶ効果的な学習法・指導法の開発	アクティブ・ラーニングやICT，TO学習等を取り入れた授業を相互に参観し，その指導法を教科会で共有することにより指導力の向上を図る。	A		情報交換を積極的に行い、指導力向上を図る。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
18 英語科	総合的なコミュニケーション能力の育成	言語の使用場面を考え，4技能のバランスのとれた言語活動を行い，オーセンティックな題材や視聴覚教材を取り入れた授業を展開する。	A	A	・それぞれの技能のバランスに配慮する。
		授業導入時や展開時における日常会話や音声表現活動（自己表現活動）を実施する。	A		・実践的なコミュニケーションを意識する。
	基本的な英語力の構築	自主学習ノートの定期的な提出やこまめな小テストの実施・評価と共に，効果的に生徒へフィードバックする。	A		・効果的な宿題の出し方や，小テストの工夫。自学ノートの取り組みが作業ではなく，より学びにつながるよう改善。
		辞書の活用を奨励し，語彙を増やすことを目的とした諸活動を実施する。	A		・導入時における辞書指導。
	英語を用いた言語活動を積極的に行える力の育成	プレゼンテーションやディベート活動といった発展的な言語活動を通して，自分の意見をきちんと英語で表現できる力を養う。	A		・前期課程はスモールトーク，後期課程はディベートを念頭に指導する。
		教科書だけでなく様々な補助資料を用いて異文化理解を進める。	A		・効果的な補助教材の選定。
	国際的な視野を広げる言語活動の構築	ALTや留学生とのコミュニケーション活動を通して，様々な考えに触れる機会を設ける。	A		・ALTの効果的な活用。特に前期課程のALT参加は，毎週か隔週かの検討が必要。
		インタラクティブフォーラムやスピーチコンテストなどに積極的に参加し，意欲的に言語活動に取り組む機会を設ける。	B		・大会への参加を通して，より高度な英語力の育成を行う。
	6年間を見通した英語科としての指導形態の確立・発展	教科会や「ちょっと見週間」等を通して，各年次における授業の検証と継承を行い，並木英語科スタンダードを確立・発展させていく。	A		・常に6年間を意識した指導を行う。
		ディベート授業研究発表会の実施や公開授業等を通して，本校での授業形態を外部に向けても発信し，県内の英語教育のリーダー的役割を担っていく。	A		・授業公開を通して，並木英語科スタンダードの継承と発展。
19 芸術科（音楽）	基礎的な能力を養う	表現活動に必要な知識と技能の定着を図る。	A	B	実技面において、新型コロナウイルス感染症への対策を講じながらの方策を模索していく。
		反復練習を重視し，表現に必要な技能や能力を養う。	B		感染症防止を徹底しながら、生徒が可能な限り実技を行う場面を増やしていく。
	幅広い表現活動の充実	歌唱，器楽，鑑賞，創作それぞれの分野においてグループ学習を取り入れた活動を行う。	A		器楽の分野において、個人練習から早期に脱却してグループ活動の時間が多く確保できるように授業構成を考える。
		グループで意見交換の場を持ち，意図をもって表現したいことを意識した活動を重視する。	A		歌唱・器楽の両分野において、生徒自身の意図が明確化されるような資料の作成の工夫を行う。
	鑑賞教育の充実	音楽のみでなく，時代，歴史等にもふれ，幅広い観点から知覚する能力を養う。	A		作品の歴史的背景や音楽的要素を様々な視点から学び，理解を深める。
		音楽の諸要素と、それが何を表現しているのか考えることのできる視点を養う。	A		引き続き、音楽の諸要素と表現との関わりを意識した授業づくりを続けていく。
	創作活動の充実	基礎知識を用いて簡単な創作を行い，作って意図をもって表現する活動を行う。	A		ChromeBookなどを効果的に用いて、楽譜に対して抵抗感のある生徒も創作ができるような工夫を行う。
		音楽の構成や進行に従って作曲を行い，発表活動を行う。	B		自ら音を選ぶ場面を、これまでよりさらに増やしていく。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
20 芸術科（美術）	基本的な美術の能力を育成	体験活動を充実させ，美術の基礎知識を身につける。	A	A	限られた時間の中で、充実した体験ができたと思う。次年度も継続したい。
		色彩の効果を考えて構想を練り，材料や用具の生かし方を考え，工夫してあらわすことを意識づける	B		材料や用具の選択の幅がもう少し広がればよい。
	柔軟な表現活動を育成	豊富な知識や表現方法を能動的に活用する喜びを養う。	A		思考→制作→展示の段階を踏むことによって、創造活動の喜びを十分に得られたと感じる。
		自他の価値観を認め，内面的なイメージを豊かに表現する力を持って表現活動する。	A		価値観の相違を感じとり、自分と他人の立ち位置の違いが理解できるような授業展開を行いたい。
	鑑賞活動の充実	自国の美術文化の特徴を理解し，優れた伝統美術に関心を持つ。	B		美術史の動画を制作したものの、鑑賞の時間が不足していた。
		作品や作家の言葉から美術の多様性に気づき，自分の表現に生かそうとする態度を養う。	B		美術の多様性をさらに伝えられるような授業展開をしたい。
	美的体験を日常生活に生かす	実生活に活用できるような，情報やイメージを効果的に伝えるデザインする力を育てる。	B		「人に伝える」という点においては充実していたが、デザインの観点からみると指導不足を感じる。
		絵画や彫刻・工芸などを暮らしに役立てる感覚を身につける。	A		身近な芸術、生活に近いアートを発見することができた。
21 保健体育科	体力を高め，心身の調和的発達を図る。	授業及び体力テスト等への積極的参加姿勢を育成する。	A	A	体力テスト上位者を表彰，後期生では種目選択を導入
		体つくり運動の効果的な実践を行う。	A		体つくり運動で体力を高める運動の取り組み強化と，各種目の準備運動時に補強運動の導入
		自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育てる。	A		体力テストの結果を基に，自己の状況を把握させる。
	運動を豊かに実践することができるようにする。	運動の合理的な実践を通して，運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにする。	A		個々の能力に応じた運動で楽しめるルール作り
		幅広い基礎運動技能を修得させる。	A		前期生から多くの種目を経験させ，指導も教員の専門種目を生かした担当制を導入
		ルールを理解させる。	A		段階的な指導を継続し，ルールの定着を図る。
	スポーツマンシップの育成	規律ある行動をとる。	A		4月の授業時に全学年，集団行動を徹底して指導し年度のスタートをきる。
		あいさつを励行する。	B		授業開始・終了，ゲーム開始・終了時における挨拶の徹底
		マナー，ルールを尊守させる。	A		常に声かけを行い，フェアプレー精神を常に意識させる。
	保健学習の充実	心身の発達と心の健康について理解させる。	A		心身相関の理解
		健康と環境，障害の防止について理解させる。	A		ICT機器の活用や実習により，生徒の能動的な学習に結び付ける。
		健康な生活と病気の予防について理解させる。	A		各自の生活習慣や食習慣を改善し，規則正しい生活習慣を身に付けさせる。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
22 技術・家庭科における技術分野	生徒の学習意欲を喚起する学習指導	他教科との関連を意識した授業展開から，生徒の知的好奇心を喚起する。	A	B	他教科で学習した内容を振り返りながら、材料と加工、生物育成、エネルギー変換の学習を実施した。
		グループ活動を取り入れ，自主性や協調性を伸ばすとともに，楽しい授業の実施を工夫する。	B		コロナ禍でグループ学習を控えたが、友達の作品を見たり、質問したりして、自主性や協調性を伸ばす授業を実施した。
	科学的な理解と技術の習得	実習などの体験的な活動を通して，基本的な技術を習得する。	B		家庭科や時期を意識して単元構成をしていく。
		ワークシートや学習ノートを活用し，学習内容の定着を図る。	B		今年度の状況を継続しつつ、デジタル教科書を使用して授業を実施していきたい。
	生活に生かす力の育成	生活の場面で生徒が取り組めることを意識した授業を展開する。	A		常に生活の一場面を想定して、課題解決を行う活動を積極的に取り入れた。
		ワークシートや実習を通して，生活の場面を想定できるよう授業を展開する	A		定格値を計算したり、製作品を家で使ったりして、報告をするなど、生活の場面を想定できる実習を行った。
23 家庭科	生徒の学習意欲を喚起する学習指導	生徒の興味・関心に応じ，知的好奇心を喚起する学習内容を工夫する。	A	B	視聴覚教材などを効果的に取り入れて生徒の興味を引く授業を展開した。
		実験や実習を効果的に行い，体験的に学べるようにする。	B		今年度はコロナウイルス感染症の影響で実習（特に調理実習）を十分に行うことができなかった。
		グループ活動を取り入れ，自主性や協調性を伸ばすとともに，楽しい授業の実施を工夫する。	B		今年度はコロナコロナウイルス感染症の影響でロールプレイイングなどのグループ学習を十分に行うことができなかった。
	科学的な理解と技術の習得	他教科との関連を図りつつ，生活を科学的にとらえる授業を展開する。	A		科学や社会学的視点を意識した授業を心がけた。前期の総合的学習の時間の取り組みも考慮した。
		基礎的・基本的な技術を習得できるような実習を行う。	B		今年度はコロナコロナウイルス感染症の影響で実習（特に調理実習）を十分に行うことができなかった。
	生活の場での実践力の育成	生活の中で，学んだことを生かす態度を育てる。	B		夏期休業がなかったり、通常とは異なる生活を求められることが多く、実践課題を求めることができなかった。
24 情報科	ICT活用及びコミュニケーション能力の育成	実習の中で基本的なビジネス用ソフトウェアを利用する。	A	A	現行通りで問題なし。
		情報の検索，加工，発信という基本的なICT活用プロセスを扱う。	A		現行通りで問題なし。
		グループワークや他とのコミュニケーションを重視した実習を行う。	B		グループワークの機会を増やす。
	情報倫理の育成	知的財産権について，いろいろな場面で扱う。	A		現行通りで問題なし。
		情報倫理について，自分で判断できるように指導する。	A		現行通りで問題なし。
		情報モラルを重視した指導を行う。	A		現行通りで問題なし。
	他教科や外部組織との連携	学校行事・課題探究とリンクした実習を取り入れる。	A		現行通りで問題なし。
		他教科や外部組織との連携をいろいろな場面で試みる。	A		現行通りで問題なし。
25 道徳	望ましい生活態度を身につけ，互いの個性を尊重し，自主的・自律的に行動しようとする態度を育成する。	生徒の実態や学校行事、他教科との関連を把握した上でその実態に応じた題材を提示することに努める。	A	A	各年次の生徒の実態に応じた教材の選定と、展開の工夫を行う。
		道徳の授業の中で考えたことが，学校生活のよりよい人間関係の構築や円滑な生活の維持に生かせることが実感できるようにする。	A		考えること、感じることを通じて、学校生活の中でも反映できるような言葉かけや展開の工夫を行う。
		「道徳」「道徳プラス」の授業において，学級やグループ内で意見交換や話し合いの場を設け，他者の意見を基に自己の考えを深化できるようにする。	A		グループ活動で話し合い、考えをまとめることで、自己の考えを深め、今後の生き方にいかせるようにする。
		授業で考えたことを，従前の自己の生活や考え方と比較し，今後の生き方に反映できるように振り返る場面をつくるようにする。	A		生き方考え方について自己を振り返り、今後の自分自身の生き方の指針になるように考えさせる。

別紙様式２（中等）

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
26 学級活動	学校全体や，各年次，各クラスで，生徒主体の活動の促進を図る。	生徒会主催の全校集会や，生徒主体の年次集会を開催し，生徒自らが積極的に企画運営できる能力を育てる。	A	A	年間を通して生徒主体の集会を行っていく。
		学級での一人一役の実践と工夫を図る。	A		継続して実施する。
	集団や社会の一員として望ましい人間関係を構築し，よりよい生活環境を築こうとする態度や自己を生かす力を養う。	校外学習等において，生徒主体の企画・運営をする能力を育てるとともに，集団の一員として望ましい人間関係を構築できる能力を培う。	A		生徒が企画・運営する活動を積極的に行っていく。
27 総合的な学習の時間	自分の興味あることについてのテーマを設定し，そのテーマに基づいて調べ学習を展開することで，情報収集能力や情報活用能力，考察力，プレゼン力を育成する。	「かえでツーリスト」というテーマのもと，自分の住んでいる地域を実際に歩いたり，調べたりなどして，地域再発見の機会を設け，情報収集能力や情報活用能力，プレゼンテーション能力（発表資料作成）を育成する。（1年）	B	A	「かえでツーリスト」は、コロナウイルス感染症の影響で実施しなかったが、情報収集能力や情報活用能力、プレゼンテーション能力の育成は、「ミニ課題探究Ⅰ」で行った。
		「ミニ課題探究Ⅰ」において，世界の社会問題について調べ，テーマ設定能力や調べる力，調べたことから考察する力を育成する。（1年）	A		SDGsをテーマに、哲学的思考や哲学対話を取り入れ、探究活動を行うことができた。
	テーマを追究し，課題を解決する課程において，課題発見能力，課題解決能力を育成する。また，自分の将来の夢や職業を意識し，進路実現にむけて行動する力を育成する。	ミニ課題探究Ⅱにおいて，「身近な疑問を解決する」というテーマのもと，フィールドワークや実験・観察などを行う。ポスターの作成を通して，探究の過程の手法を学び，分析力や表現力，論理力を育成する。（2年）	B		身近な疑問をキャリアの視点から取り組むことができた。コロナの影響から活動が制限され，フィールドワークをはじめとする体験学習は少なかった。
		「キッザニアかえで～将来の職業について考えよう～」というテーマのもと，自分に適した職業を知る活動や職業調べを通して，自分の将来の夢や希望を意識し，実現にむけて行動する力を育成する。（2年）	A		職業調べやオンラインでの企業とのやりとりを通して，コロナ禍にも関わらず，校外とつながる機会を設けることができた。
	課題研究を通して，グループで学び合う力，テーマ設定能力，データを分析・考察する力を育成する。また，自分の将来や卒業後の進路に向けて行動する力を育成する。	「かえでユニバーシティ～卒業後の進路について考えよう～」というテーマのもと，大学の学部・学科を調べる活動や文化祭におけるキャリアアトラクションの企画立案・実践を通して，自分の将来や卒業後の進路に向けて行動する力を育成する。（3年）	A		コロナ禍の影響で、かえで祭は実施できませんでしたが、学部学科調べを通し、将来について考えることができた。
		「ミニ課題研究Ⅲ～地域の社会問題を解決しよう～」というテーマのもと，インタビュー，体験活動，フィールドワークやレポート作成を通して，グループで学び合う力，テーマ設定能力，データを分析・考察する力を育成する。また、広島・京都の修学旅行を通して地域の社会問題を見つめ、2都市の先行事例を地域の活性化に還元できるような力を培っていく。（3年）	A		インタビュー，体験活動，フィールドワーク等はコロナ禍の影響でできませんでしたが、地域の社会問題については、しっかりと取り組むことはできた。
	6カ年教育における諸活動をとおして，自らの生きる道を，主体性をもって選択し決断できる能力を育成する。	大学出前授業，進路講演会，文理選択説明会，大学見学会，卒業生とのキャリア相談会などの進路学習を充実させ，進路に対する視野の拡張と難関大学への意識を高める。（4年）	B	A	実際に行くことはできなかったが、オンラインで可能な限り講演会、出前授業、卒業生によるガイダンスを行えた。
		道徳の授業を通して，職業観や生き方に対する意識を高める。（4年）	B		各担当者がそれぞれの視点で、生徒が職業観・生き方について考える授業を行うことができた。
		「異文化理解と自己理解」というテーマで，ベトナムへの修学旅行を実施し，異文化理解を通して自国の文化を再確認する。（5年）	B		コロナウイルス感染症の影響で海外では実施できなかったが，本状況下で最大限可能な形で修学旅行をとり行うことができた。
		自己の進路について，多方面から情報を集めることで具体的な進路を見いだせるよう一助，また，最終年次に向けて意欲の向上を図り，進路実現を目指す。（5年）	A		時期に応じて，年次集会を実施するなど，生徒に適切な情報提供の機会を設け，意欲の喚起を図ることができた。
		「進路実現と主体的な生き方の模索」というテーマで，進路情報の収集を進める一方，進路講演会などをとおして，その都度自己を見つめ直す機会も設ける。（6年）	A		対面での実施が難しかったため、保護者、生徒向けにオンライン進路講演会を2回実施した。チャットワーク機能で質問も同時に受け付けてできるだけ双方向となるように配慮した。
		並木中等での6年間の総括をすべく，時期により作文やレポート作成を行い，振り返りと将来への展望を促す。（6年）	A		生徒向けには集会を定期的に行い、節目ごとに進路や生活を考える機会を設定した。5月末の講演会での自分自身の感想を2月にも振り返り、初心を思い出すきっかけとした。

※ 評価規準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない